# 會員通信

## 自然保護を啓蒙しよう

辻　寧　昭

正月、久方ぶりに中学校時代の恩師を尋ね、昔話や現況などを語り合い懐しい一時を過ごした。恩師はいまなお、札幌市内の某高校でお元気に教鞭を執っていられるがそのときの話の中で、サロマ湖で上等なノリができていることを、はじめて知って驚ろいた、といわれた。これには私も驚ろいたが、恩師はさらに、私達はアポロが月へ行ったとか、アメリカがどうしたなどという世界的なニュースは割合知っているが、肝心な自分達の郷土のことでまったく知らないことがずいぶんある。……認識不足です、といわれた。

そのとき私は、サロマ湖のことはときどきテレビなどにも出ますから、ご覧になってください、と申しあげたが、自分で当り前というか常識と思っていることでも、立場や考え方の違う人には、まったく新知見になる場合があることを痛感した。そしてふり返ってみると、このような例にちょいちょいぶつかっているのに気づいた。

数年前、さる県のノリ養殖研究については名の知れた研究者が、オホーツク海でノリの養殖を試みに来たとき、海況などを話し合っている中で私が、オホーツク海にも暖流が流れているのですよ。といったところ、その研究者は、それ本当ですか、ちっとも知らなかった。……予定が違う。と考え込んでしまった。私は、こんなことも知らないで宣伝だけは鳴物入りの大きなことをいって、とんでもない奴だと思ったが、その宣伝が効いてかいろいろな組織を動かして来ており、また私の膝元でやることでもあるので、最終的には協力してやることにした。

またあるとき、私が前に勤務していた高校を訪れて、昔の同僚の先生方と雑談している中で、たまたまオホーツクの海でサンマの採れる話をした。すると社会科の先生が、それ本当か、指導書にだって載っていないぞ、ということだ。それで私は、指導書なんか頼りにしていては仕様がない。科学は進歩して行くのだから、自分で勉強して調べなければ、よい授業はできないだろう。といってやった。しかし後で考えると自分だって不勉強なくせに、大きなこといえた義理でないと思って反省した。

これら二つの例でもそうであるごとく、自分が仕事を進めていくのに当然調べておかなければならぬこと、また知っていなければならないことでさえ、うっかりしていることがある。まして自分の仕事に直接関係のない事柄では、知らないことのほうが多いのは当然であろう。

サロマ湖で、カキやホタテの養殖が盛んに行なわれていることは相当広く知られていると思うが、カキの場合は比較的最近、ヒョンなことから新聞などで報道されて有名（?）になり、結果的にはよい宣伝になったものである。またホタテの場合は、ごく最近系統などと一体になって、試食会や料理講習会まで開いて宣伝にこれつとめたもので、その宣伝が効果を現わしたものと考えられる。

ところで人間の生活が豊かに、そして便利になると同時に、社会機構が組織化され複雑化され、それにつれて人間の視野もある意味では広く、またある意味では狭くなる。したがって、いままでいくつかの例をあげて述べたように、人間は自分に直接関係のないことはもちろんのこと、直接関係のあることですら知らないことが多々ある。こうした情勢にあって、「人間も生物の一員である」という、大切な原点が忘れられているのではないかと、残念に思うことがたびたびである。

世はPR時代が過ぎて情報化時代といわれているが、たまたま最近、公害問題がクローズアップされ、人間の生活環境や自然保護の認識が深められつつあるようで結構なことだ。この機会にわれわれの協会としても、自然保護の思想を大いにアピールし社会に浸透させたいものである。

（サロマ海藻類人工採苗場）

## 自然保護における造園の役割

笹　本　洋　三

いま札幌には、造園を業とする家が約一〇〇軒以上におよんでいる。この現象は生活環境に対する人間の関心が深くなり、さらに自然要素に眼がむけられるようになった関係だと思う。高さ四メートルくらいの庭木一本は、約大人一人が一日に必要とする酸素を出しているのであるから、美と酸

素を商っているといって差しつかえない。

昨年、私どもの会社一軒で、庭木新植約二、〇〇〇本、芝生造成約四〇、〇〇〇㎡を実施したのであるから、人工景致による自然の復元に役立っているはずである。また、毎年約一億数千万円の庭木が本州から移入されている実状から考えて、自然の損傷に追いつけないのは不思議である。

それでひとつの提案であるが、自然を破壊する恐れのある工事は、自然環境をつくったうえで実施することが望ましい。

§

最近、ハワイに行って感じたことであるが、並木は法律によってつくられているし、墓地は美しく整備された公園となっていて、重要な観光資源ともなっている。さらに、気温が二二～三度であるにかかわらず、どこへ行っても害虫は一匹もいない。ちょっとベンチで休むと、野鳥が私の肩や手にとまって逃げない、誇張でなく、まったくの楽園そのものであった。

一方、約五、〇〇〇種類の植物が繁茂している。しかし、原産種が少なく、全世界から集められて繁殖し、美しい自然が展開されていた。気候は異なってはいるが、北海道も自然保護に徹したハワイのような郷土としたいものである。

（北海道造園コンサルタント社長）

## アフリカの旅

**藤原英司**

東アフリカから中央アフリカにかけて、国立公園や野獣保護区、森林保護区などを二十カ所ほど歩いてみました。その中には一般の人が行かない場所もいくつかありましたが、そのような場所へ行くのには、予想以上の費用がかかりました。アフリカはずいぶんひらけたといわれますが、国内旅行はまだまだ不便です。

アフリカの野獣保護区を見て感心することは、人と動物が、うまく調和して生活しているようだということでした。国立公園（ナショナル・パーク）と名がつくと、その中に住民が住みつくことは許されないそうですが、野獣保護区（ゲーム・リザーブ）という名称の地域には、住民が住むことが許されているとききました。ゲーム・リザーブでは、村をライオンやその他の猛獣の攻撃から守るため、村の周囲に高いイバラ垣をきずいているところがありました。

東アフリカでは「野生のエルザ」の著者、ジョイ・アダムソンをたずねました。十年ほど前に「野生のエルザ」を日本に紹介していらい、一度会いたいと思っていた人でした。夫のジョージ・アダムソンの本（「ブワナ・エルザ」）も訳したことがありましたので、会いたいと思いましたが、彼は新しい仕事のことで、エチオピア国境のほうへ行っていて留守でした。

ケニヤでは、ほかにハーソーン博士夫妻に会うことができました。ハーソーン夫人は、最近文春から刊行した訳書「わが名はダタタリ」の著者です。活動的でほがらかな夫婦で、東アフリカの社交界ではよく名のでる人です。

キリマンジェロの麓に、野生生物管理大学（通称ムエカ大学）があります。野獣監視官を養成する大学ですが、そこをくわしく見学することができました。

中央アフリカでは、ザンビア共和国のルアンガ・バレー野獣保護区へはいりました。この保護区には「白いインパラ」（集英社刊）の著者ノーマン・カーがいます。彼のところにしばらく滞在して、野獣の中を車を使わないで歩く旅を経験しました。ライオンがうろつく叢林地帯の中を、テントを張らずにごろ寝をしながら歩きまわる旅で、まことにスリル満点でした。

このルアンガ・バレーには、国連の協力によって建てられた野獣解体工場があります。保護領内でふえすぎたゾウ、カバ、水牛などを射殺して解体処理する工場です。所長のジャック・ボーサ氏が場内をくわしく説明しながら案内して下さいました。

ザンビアの南のほうに、アフリカ初期の探検家・リビングストンにちなんでつけられた同じ名前の町があります。ここはビクトリア瀑布があるのでも有名です。また、野獣公園（ゲーム・パーク）もあり、この町で博物館、ゲーム・パーク、昔の土民の村、滝、峡谷などを歩き、往時をしのびました。

アフリカの野獣保護区はかなり観光化されたといいますが、それでもやはり、自然と人間について、なにか根本にたちかえって考えを迫るものがあり、自然保護にたずさわる人々に、一度はたずねてみることをおすすめしたい土地です。

（野生生物保護基金日本委員会常任理事）

## 「あみ」を張ろう

**斎藤禎男**

午前五時にフトンからはい出して、春別川に行った。水平線に昇る太陽に、オオハクチョウの羽ばたく姿をセットして見たかった。太陽は味方せず、取材班は引き揚げ

た。冬の尾岱沼はどこまでも氷だった。

午前九時を回ったころ、宿舎を出発して車を飛ばす。途中、かなたの森にワシ類の姿を見ては車を止め、双眼鏡で追い、時折り上空をかすめる鳥影あれば『ストップ！』の大声をかける。釧路で二時間ほどコーヒー屋にくつろいで、帯広でソバをすすり、その日の午前零時ころ札幌帰着。北海道は狭いと思った。流氷をオカズに朝メシが尾岱沼。釧路昼めし。帯広夕めし。札幌でフトンにもぐり込む。これが現在の冬の北海道であり、日頃『あーだ、こーだ』と苦情ばかり申しあげている開発建設部の除雪グレーダーが、なんとたのもしく見えたことか。おまけに取材車が、路肩を踏みはずして深雪に『ズボボボ』と突入。近くにいたグレーダーに『よろしく』と頭を下げた。

この冬は二度オホーツクを訪れた。一回の日程六日間で約二千キロの走行距離。新聞社専用車両のほぼ一カ月分に相当する荒っぽさである。東京は横浜の『上にある』式の表現をすれば、宗谷岬へ一たん上がってオホーツク海岸に沿って国道を下がり、尾岱沼〜釧路そして札幌のコース。波打ち際に舞い降りたオジロワシを観察していると対向車が、取材車の横で止まり、私達の様子を興味深げにながめている。観察するほうが観察されるんじゃしようがないな、とチラリ横目で相手を見やると彼は車を降りて来た。ニッサンの社章を胸につけている。『あそこにキツネがいましたよ』ああ、なんということか。

取材班は、夜の国道はキツネが多いとの情報に基づいて、午後十一時すぎまでもオホーツクの道路を走らせた。取材車の前部座席でカメラマンが、辛抱強く被写体を待った。ライトが横なぐりの粉雪を照らし出し、灯台の明りが頭上をかすめては消える。このキツネ情報はそんな日の直後だった。オジロワシの撮影をそこそこに、車を飛ばし、双眼鏡を離さなかった。にもかかわらずキツネは消えていた。

新聞にオホーツク連載記事『流氷海岸』をのせ始めると、批判の手紙が届いた。アザラシ狩猟者の記事が自然保護思想に反するとの由である。将来、釧路湿原の天然記念物・タンチョウがふえ過ぎて調整しなければならなくなったとき、道林務部は野生動物コントロールの立ち場から文化庁へ報告書をしたため射殺することがあるやも知れない。そんなとき、この匿名手紙の主は卒倒されるだろう。野生動物は人間のためにあるのだ、と私は考える。

オホーツク海岸は、人間の住むところである。でき得ることなら小清水あたりに自宅をかまえ、札幌へ通勤したい。アザラシのとぼけた顔。群れる海鳥。キツネの母子。流氷の先ぶれとしてやってくるオジロワシの群れ—こんな環境でわが息子どもを育ててやりたい。そしてこの野生動物の楽園にも、組織化された〝黒い手〟が伸びている。これは『人間のため』のものではない。不必要を単純な利益のために必要と偽装しているに過ぎない。オホーツクに〝黒い手〟防止の『あみ』を張ろう。

（北海タイムス社会部）

## 西野にて

安田美穂子

春休みに、東京から来ていた大学三年の娘を帰して、ほっと一息。日向ぼっこをしつつ家のまわりに出ると、南側の一角の雪が消えて、つくしん坊がすでに芽を出しはじめている。山も、あちこち赤土の肌を見せはじめた。

そうだ、蕗の薹もそろそろ出ているかなと思うと、朝、地下室から出して流しに浮いている塩漬の蕗が、急にまずそうになった。お向いの娘さんが「妹が蕗の薹をとって来て、ままごとしてたよ」と、話してくれる。蕗が目について、八百屋の店先の真青な蕗もどこでとれたのかと、気になって仕方がない。

西野附近の林檎園は、大分切り倒されてしまった。家にはまだ林檎の木が十一本あるが、消毒もしてやらないので年々枯れてゆく。私ども夫婦二人の一年中の風呂の薪も、この林檎の枯木でまかなわれる。

地面一面に茂っているタンポポの見事さは、ご近所の坂本直行夫人からも一見事なタンポポですね。おしたしにするとおいしいですよ。とくにお宅の林檎園のは上等です」といわれるくらいだが、肝心の林檎のほうは渡辺千尚先生に「一度、学生を連れて来て見学させたいよ。ありとあらゆる病害虫がついている」と感心されるくらいで小さな実を二、三コ東京に持参したら、ざくろと間違えられてしまった。

手稲町が札幌市に編入される少し前、この裏の学田山は埋立業者に土を売られたとのことで、もともとそんなに良い山ではなかったとはいうが、岩の出るまで土を剥ぎとられている。

それでもまだ、ときどきブルドーザが数台のダンプカーを従えて、土を運び出す。冬のはじめ、たまりかねて市役所に電話を

して聞いてみると案の定、土泥棒達で、追い返えされてその後はまだ現われないが、削りとられた山肌に萩や月見草、蕗が育つまでまた何年かかることか。雪が消えると赤土の山は見ていて恥しい思いがする。

「小母さん、これ食べて」と、新聞紙に灰色のキノコを包んで秋の夕暮、お向いの娘さんがとどけてくれた。さて、親切は有難いが、生命が惜しい。直行夫人に鑑定していただくことにして、包を抱えて訪ねた。「大丈夫、全部ボリボリでございます」と保証していただいて帰り、おいしいものだと夕食の味噌汁は大好評だったが、これが病みつきで主人は「落葉キノコというのも、おいしいそうだ」とか、「窓から見てると、今朝から何組も何組も入物を持った人達が山に行くから、僕たちもキノコを探してこよう」とかいって大騒ぎである。

夕方、散歩にいって落葉松の林の中で、「ここにもあるよ、ほら、あそこにもあった。気をつけているとこの種類のが一番たくさんあるから、きっとこれが落葉キノコだ。はじめは少しとることにして、これがそうだったら、またくればいいね」と、銀白色で縁の上が薄茶色なのを大切にとって帰宅した。

「いや、これは違いますな」と、どなただかにいわれ、「手をよく洗いなさいよ、やはり一度、専門家に連れて行ってもらわないと駄目かな」と、子供のようにしょげ切っていた。

荒れ地に家を建てっぱなしであまり淋しいので、近所からクローバーの白や赤、タンポポなどを抜いて来て植えたのが三年前、昨年は畑をしようと種子をまいても、苗を植えてもどこからともなく雑草が押し寄せて来て、東京から来た両親も「札幌は作物のよくできるところね。草の中から胡瓜や絹さやがとれる」と喜んではくれたが垣根もしないで主人は「『お客様が、お宅広いのですね。あの山のところまで庭ですか』ってほめてくれるんだ」などといってニコニコしている。

札幌に来て早丸々四年、冬は玄関からスキーを履き、春は雪の下をくぐって、流れてくる水の音を聞いて蕗を探りに裏山に登り、カッコーが啼けば豆をまき、赤とんぼは山々の紅葉に先がけして群をなし、手づくりの大根で冬の漬物をつけて鼻を高くし、ここにはまだ季節感のあるのが嬉しくて、しみじみと自然を楽しんでいる。

（在・札幌市）

## 日高山脈と公園

中田幹雄

国定公園化の間近い〝日高山脈〟について、最近、日高の山仲間と話し合う機会を得た。そこで、私もふくめて日高の山仲間の中で、いくつかの杞憂を抱いている。

今日、原始性を保っているという北海道の中で、日高山脈は残された自然の唯一のものとなろうとしている。こうしてみると今日の公園化はおのずと気になり他人事とは思えず、いつの間にか公園化されたのちのことまで考えてしまう。

というのも、最近とみに自然を観光産業的な面ばかり地方行政の中で重視し、その成果（?）を如実に見せつけられ、嫌気がさしているからだろうか。たとえば、はじめのPRには本腰が入れられるが、その後ゴミの山が出現しはじめる頃には、知らぬ顔というのが多いのではなかろうか。

日高山系国定公園期成会の席上でも、こうした杞憂は消されずに、増大するばかりなのだ。公園名称について話し合われ「日勝エリモ」という案に対し、日高山岳連盟は「日高山脈」、もしくは「日高山系」であるべきだとして反対した。しかし、エリモはすでにPRされて有名であり、公園名称のPRは責任をもって行なうという。

これらの人々は、いま、公園指定を受けようとしている対象が何であるかを知りながら、単に原始性に富む日高山脈をいかに観光的に生かすかを考えているにすぎず、本当の日高山脈をも知らず、その自然の価値を自らの手で踏みにじろうとしている。

そんなPRでこられる人々が気の毒であるとともに、また一つ、大きなゴミの山が誕生するのであろうか。そのうえ、公園化され各種の施設がつくられることにより、安易な登山が奨励されることになりはせぬか……。たまたま、山仲間の一人が「公園化は名前だけで、何ひとつしてもらわないほうが、むしろよいのだ」と。

公園化は、自然と人間との相関関係である。公園化された自然の破壊は、自然と人間との接点をどこにおくかで決まる。日高山脈にしても、その調和ある接点がどこにおかれるべきかを、早急に決める時期がきているのではなかろうか。

（北海道百年記念施設建設事務所）